



# 志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13  
（株）武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224  
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

## 合気語録

師匠と弟子

自分一人で、武術の稽古は出来る。また、兵法の極意は知り得ないからである。だから離れる必要がある。西郷派大東流では、したがって二番目に「離れる」という事柄が、第二段階の課題となる。決して「破る」のではない。

流派の道統を伝えるのは宗家唯一人であり、各支部の指導者ではない。だから離れる必要がある。つまり「離れる」とは、高次の次元を指して、高い次元に至る事を言う。「離れる」目的は、過去の研究を体系付け、指導者の教えを超越して独自の創意工夫を行なう段階に突入しなければ、この意味は本当には理解されない。

また習・離・破(世間では習・破・離と言つたが)は「時間的な意味合い」を持ち、昔は師匠の有限時間を計算してこの設定を決定したものである。だから、多くの修行者は「自分の若い時」に弟子を取り、弟子を通じて学んだことを、師匠に逐一確認しながら、次の業を学び取つていったのである。問題は、第一段階の「習う次元」から、第二段階の「離れる次元」に至る時の非情さであり、上達に至つたと思つては、積極的にかつての指導者から離れ、支部道場を興し、高次元を目指さねばならない。いつまでも、ダラダラと、かつての指導者の腰巾着をしていては、上達は臨めない。西郷派大東流では「宗家一親等門人」なるものがある。これこそが習・離・破の実践機関であり、最良の上達に至る道は、直接、弟子が宗家と一親等の誓い「を結ぶ事である。一番最初に入門する指導者の門は、ただ己の目を開くだけの存在であり、それ以外を除けば、指導者と言つてもは自流にとつて、良いものも悪いものも同時の兼ね

備え、同時に一歩外に出れば、平門人と同じ修行者の段階である事は間違いない。そしてまた、指導者と離れ、宗家と一親等の誓いを立てたメンバーの一人に過ぎないからである。世間風に言えば、年齢的に生まれた年月が早い遅いかの違いではない。同じ兄弟姉妹でも、弟や妹の方が、兄や姉に劣つてゐるとは断言できないし、むしろ弟や妹の方が優れている場合もある。怠けていれば、指導者と離れ、後から来た者に逆転され、ついに追い抜かれてしまうのである。

指導者はかつての師から技を学び、それを教つたが、その技が真物であるか否かを確認する為には、「離れる行動」を起こし、今度は自分が弟子を集め、「指導する」という立場に廻るのである。

しかし弟子を集めるだけではダメで、「弟子を持つ」という事は、弟子から尊敬されなければならないのである。弟子から尊敬されるという事は、絶対に自分の事を「さん」付けで呼ばせてはならず、私は十八の時に大東流の道場を開き、既に五〇人の弟子を集めたが、その弟子のタダの一人であるも、私の事を「曾川さん」という馬鹿者は一人も居なかつた。これは非常に大事なことである。年下や同年齢に対しては、当然「先生」と呼ばせるべきであり、上の者からは「師範」と言われるべきである。「師範」あるいは「先生」と尊敬されることが道場の運営に於いては大事なことであり、これが「家庭的な雰囲気」等と称して「さん」付けで呼び合うのは「秩序の崩壊」であり、こうした「馴れ合い」が道場の根本的な武士道精神を崩壊させるのである。私は弟子から十八の時に「師

範」あるいは「先生」と尊敬されて呼称され、また進龍一師範も習・離・破を実践し、二十四の時に私の許から離れ、習志野で道場を開き、彼ですら「進さん」等と一度も言われた事はなかった。それに、今思う事であるが、彼は私の若い時から厳しく躰られた為か、わが師匠に逆らう事を知らなかつた。昨今の指導は技中心となり、あるいは強弱論に傾いて、「躰」や「礼」を軽んずる傾向にある。また師匠の言つた事は二つ返事で実行した。師匠は自分の手本であり、鏡であり、これが間違つてゐる事は絶対にあり得ず、またそう思う事が、やはり自分自身の価値観を高め、弟子を強くしていったよつた。

## 合気戦闘理論 その八

これは「続日本紀」の「文人武士は国家の重んずる所」とあり、また『平家物語』には「武士ども散々に射奉る……」等の一節があり、これらは広い意味で武士を表現したものである。

そして、武士の儒教的な思想に基づき、おのが行動を思想と一貫させて大成し、鎌倉時代から江戸時代にかけてこれが普及・浸透し、わが国の武士階層に受け入れられた倫理や道徳が「武士道」である。したがって時代的には非常に新しく、周知が先入観でないでいるほど、古いものではない。この武士道は、鎌倉時代後期頃から発達し、江戸時代中期頃に、儒教思想に裏づけられて大成する。封建支配体制の観念的な支柱をなし、その背景には忠誠・犠牲・信義・廉恥・礼儀・潔白・質素・儉約・尚武・名誉・情愛などを重んずる思想が含まれていた。山本常朝の口述書「葉隠」の冒頭には「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり……」で始まり、これは衆目の知るところである。では、なぜ常朝は武士社会に対して、改めて「武士道の何たるか」を説かなければならなかつたか、これは日本人に元々、武士道の何たるか、が欠けていたからである。江戸時代の、お上(主君)から扶持米

とところが現在はどうであろうか。「おことばですが」と、逆に自らの師を、世間一般的な世俗の常識論で論ずる者がいるではないか。これがそもそもの「武士道崩壊」の元凶である。しかし習・離・破の意味を知つて、「離」を実践した者は、師イコール自らの鏡であるから、例えば、自分の師匠が遠路遠々地方から出て来る場合、これを丁寧に迎えるのは常識である。この丁寧さに、「やり過ぎ」はない。かつては、師匠に対しての「出迎え」「見送り」は、求道者の常識であつた。しかし求道者は、その目的意識をその度変更した為、礼儀を重んずる事より、師匠を勝つ為の「ヒント提

供者」にしか思つておらず、単にコーチ的な存在以外には扱わないようになってきている。かつては毎回、私が上京する際には、進龍一師範が、東京駅の特急寝台の到着するプラットフォームまで出迎に来ていたことが、今思えば懐かしく思われ、それが非常に印象的であつた。しかし現在の指導者に、こうした者を見る事は余りにも少なくなつた。そして我が流に於ては、以後、進龍一師範を上回る、彼以上の礼儀を心得るものは、誰一人として出ていない。これを考えると、もう一度「自分の師匠とは何か」という武術の「習」と言つ、第一段階について考え直すべきである

また、如何に優秀な人間であろうとも、それはその人が、その生涯を通じて、その経験に基づき、それが武士道を構築したものでない。これは、むしろ数百年単位の集積が、武士をして、その生き方に生き方を授け、その生き方こそが、武士階級における有機的な産物であるとい説している事である。そしてこれは、氣宇壮大な倫理観とも密接に繋がつてゐるのである。アサー王物語が母体になつた騎士道また西洋には、日本の武士道に對峙するかの様に、騎士道(chivalry)があり、中世ヨーロッパで、騎士身分の台頭によつて起つた騎士特有の氣風が生まれた。そしてこの母体になつてゐるものが、『アサー王物語』(Arthurian romances) / 六世紀のウェールズの武將、後のブリタニア王アサー(Athur)である。アサー王物語は、実際には実在

供者」にしか思つておらず、単にコーチ的な存在以外には扱わないようになってきている。かつては毎回、私が上京する際には、進龍一師範が、東京駅の特急寝台の到着するプラットフォームまで出迎に来ていたことが、今思えば懐かしく思われ、それが非常に印象的であつた。しかし現在の指導者に、こうした者を見る事は余りにも少なくなつた。そして我が流に於ては、以後、進龍一師範を上回る、彼以上の礼儀を心得るものは、誰一人として出ていない。これを考えると、もう一度「自分の師匠とは何か」という武術の「習」と言つ、第一段階について考え直すべきである

したが、否かは不詳であるが、武將アサーと円卓の騎士達とを主人公にした武勇と恋愛の物語である。古くは九世紀初めの文獻にその名が見え、十二世紀以降、フランス・イギリス・ドイツの三国を中心にヨーロッパ全土に伝播した。中世後期には、トリスタン伝説や聖杯伝説も混入して、韻文・散文の物語が成立し、イギリスでは十九世紀の文学や絵画に復活して、一般には「円卓の騎士」あるいは「騎士道物語」として知られている。騎士道はキリスト教の影響をも受けながら発達し、忠誠・勇気・敬神・礼節・名誉・寛容・女性への奉仕(chivalry) / 女性を尊重して優先させる欧米風の習慣)等の「徳」を理想とした思想である。しかし日本の武士道と、ヨーロッパの騎士道には決定的な一線において、違いがある。それは儒教とキリスト教という宗教的な違いでなく、日本のそれは、全体の奉仕であるのに対し、ヨーロッパのそれは、騎士や貴族階級の為の奉仕であり、これを現代風のアメリカの民主主義流に置き換えるならば、レディー・ファーストと相互して、「金持の、金持ちによる、金持の為の奉仕」であり、何人も分けへ隔てなくという思想は、その根柢にはない。そこに存在するものは、階級社会のそれである。そして日本の武士道は、「忠君」であるが、日本のそれも、江戸時代に確立されたと称するが、この思想の確立と、その思想を背景とした「実践」という行動力から見てみる

また「離」とは何か、ということも真剣に考えなければならぬ。「離」とは師匠から離れた事ではない。師匠から習つた事を、慎んで厳粛に受け止め、師匠とは違つた自分独自の技法を展開する事であり、これに際して、「解らぬ点は、直々に総本部まで足を運び、師匠に再質問するなり、再教授を受ける」という事が肝心であり、離れて、独自に自分勝手な道場展開をする事ではない。自らも「修行者である」という事を忘れてはならないのである。西郷派大東流は決して「教えない」流派である。したがつて、教えなければ、自らがそれを求道しなければならぬ。

と、「考え方」と「行い」に大きな差が生じている事が分かる。これは太平洋戦争当時の、日本の旧陸海軍軍人に、これを置き換へれば一目瞭然となる。太平洋戦争当時、「武士道を実践した」軍人など、殆ど皆無だつた。軍人はかつての武人の生き態をわが胸中に抱いて奔走したが、それは果敢ない幻想であつた。自らに降り掛かる危険も顧みず、勇猛果敢な軍人がいる一方、他方においては、高級軍人の大半は、前線より遙か後方に布陣し、ここに司令部を置いて、武士道の欠片などト欠片もなく、階級が佐官、将官と上に行く程、それは甚だしかった。日本の敗戦における戦争指導責任は、実はここに回帰される。そして勇猛な將軍の名を上げれば、大戦末期、硫黄島を死守し、連合軍を震撼させた、小笠原兵団の兵団長・栗林忠通中将くらいのものであつた。また逆に、卑怯弱まりない、敵前逃亡同前の敗走をしたフィリピン第四航空軍司令官・富永恭次中将は、マニラ守死を強行に主張しながらも、自らは台湾に逃げ遣つて、温泉に浸かり保養したり、戦後は政府から貰う年金や、高額の軍人恩給で安穩とした余生を送つた。こうした意味では、海軍の福留繁中将も同罪であつた。海軍に、乙作戦計画書漏洩事件といふのがあつた。これは連合艦隊司令部が、パラオからフィリピンに逃げ出した事に端を発する。

したが、否かは不詳であるが、武將アサーと円卓の騎士達とを主人公にした武勇と恋愛の物語である。古くは九世紀初めの文獻にその名が見え、十二世紀以降、フランス・イギリス・ドイツの三国を中心にヨーロッパ全土に伝播した。中世後期には、トリスタン伝説や聖杯伝説も混入して、韻文・散文の物語が成立し、イギリスでは十九世紀の文学や絵画に復活して、一般には「円卓の騎士」あるいは「騎士道物語」として知られている。騎士道はキリスト教の影響をも受けながら発達し、忠誠・勇気・敬神・礼節・名誉・寛容・女性への奉仕(chivalry) / 女性を尊重して優先させる欧米風の習慣)等の「徳」を理想とした思想である。しかし日本の武士道と、ヨーロッパの騎士道には決定的な一線において、違いがある。それは儒教とキリスト教という宗教的な違いでなく、日本のそれは、全体の奉仕であるのに対し、ヨーロッパのそれは、騎士や貴族階級の為の奉仕であり、これを現代風のアメリカの民主主義流に置き換えるならば、レディー・ファーストと相互して、「金持の、金持ちによる、金持の為の奉仕」であり、何人も分けへ隔てなくという思想は、その根柢にはない。そこに存在するものは、階級社会のそれである。そして日本の武士道は、「忠君」であるが、日本のそれも、江戸時代に確立されたと称するが、この思想の確立と、その思想を背景とした「実践」という行動力から見てみる

### 西郷派大東流合気武術総本部

## 冬季近畿関西講習会

平成16年12月19日(日)午後1時~3時  
講習会場: 滋賀県立武道館・柔道場

JR大津駅下車(徒歩8分)  
詳しくは下記のHome Pageを御覧下さい

<http://www.daitouryu.com>



イラスト/曾川 彰

講習会費用: 10,000円

指導内容:  
宗家直伝による講習会。合気揚げを中心にした力貫・合気初伝から奥伝・合気柔術合気行法・食養野草の智慧・靈的食養道などの講話。

お問い合わせ: 総本部尚道館 093(962)7710(代)